

『平家物語』 初期生成と藤原定家 (上)

—— 編纂の視点から ——

尾崎 勇

〔要旨〕

延暦寺の別所の西山で『古今集』を校合していた寂超は、『栄花物語』の章段名に倣って、『大鏡』が語り終えた万寿二年(一一〇五)より嘉応二年(一一七三)三月までの歴史時間を対象にした『今鏡』を創っていた。出自の九条家の後退も動機となつて西山に隠棲した慈円は、嘉応二年の平家側による執政の「臣」藤原基房への暴挙の事象から始発させ、源頼朝に比重をかけた原『平家物語』の『治承物語』を企画し、西山に有縁の人材を呼集して本物語を創出させる。慈円圏を組織したわけである(拙著『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年)。

九条家と終生にわたつて歩調をそろえて生き抜いた定家は、慈円圏に参画する。そのことを象徴するのが編纂された『栄花物語』自体を定家は披見していた事実なのである。^{〔註1〕}

(一) 編纂をめぐる——問題の所在——

平曲の解説書『追増平語偶談』(天保五年(一八二七)夏、藤井雪堂が著作)には、

平家物語二十巻は信濃前可行長の作なり。(中略)中古より板本の平家物語と云もの十二巻あり。これは為

家といへる人、行長の正本によりて琵琶法師唱歌のために作れる諷物になす為の故にや、(中略) 為家と斗有て、いつれの人とも知かたし。但し二條為家卿の御事歟、定かに知へからず。

とある。この雪堂の文章をもとに、富倉徳次郎は、

……この雪堂が見たと考えられる「長門本」と同系統と考えられるものが天理図書館蔵本にある。宝玲文庫の印があり、十二冊二十巻の「長門本」で、その巻一の冒頭に「平家物語之事」として、雪堂引用のことばが記されているので、雪堂の説くところが「長門本」の古写本の巻頭言によることが明瞭となる。

この為長説については、後藤丹治が早く、「平語偶談」(『追増平語偶談』の初稿本) によつて紹介せられたが、(中略) この「平語偶談」の伝えをた易く否定できないとせられたのである。

このむしろ王朝以来の文学伝統に立つ歌人というべき二条為家(一一九八—一二七五)が、この成長期にあつて、平家物語の作者として考えられるということは、興味ある伝えであると私は思う。(中略) 父定家と親しく、祖父俊成の養子としての位置のあつた隆信の筆になるといふ鏡物「弥世継」の存在に心を用いていたのではなからうか。(中略) 王朝以来の鏡物の伝統に立つ史観と感觸を持つ作者の参与を考えるということは、許される推定かと思うのである。^{〔註2〕}

として、藤井雪堂が『平家物語』生成過程に藤原定家の嫡子の為家が関与していたとの伝承に対して、施線で興味を示している。しかも二重施線では、散逸してしまつて定家の異父兄の隆信作『弥世継』にふれながら、『大鏡』・『今鏡』等の「鏡物」すなわち「世継物語」の史観や感觸を持つていた人が本物語の作者と推定している。この富倉徳次郎の言説は看過できない。

「世継物語」の系譜の発端にある『栄花物語』を足掛かりにして「編纂」ということに注目して『平家物語』創出の周辺までを次に俯瞰しよう。

『栄花物語』正編三十巻は赤染衛門が旺盛な編纂意識のもとに統括者・編纂者となつて仕上げた。^{〔註3〕} 三十一巻から四十巻の続編も「複数の手になる(中略) 何らかの機関で、細々とはあろうが、修史事業が継続されたとい

うことになろう。」とされている。^{〔註4〕}『栄花物語』を参照して、紀伝体の構成で藤原道長の栄華の由来を説いたのが『大鏡』であつた。^{〔註5〕}道長の女を母とする後一条天皇の在位する治世から、武士階級の平清盛が女の徳子を高倉天皇に入内させる前年まで優美な廟堂に焦点を絞つて描いたのが『続世継』すなわち『今鏡』である。

『世継物語』の先鞭をつけた『栄花物語』は編纂された編年体の物語風史書である。^{〔註6〕}登場人物の内面描写にあまり及ぶことはなく、表面的な叙述傾向に傾斜している『栄花物語』を参照した『大鏡』の作者は、人と人とのつながりである人的ネットワークや登場人物の運命等にも関心がある。そして往時をしのぶ翁語りの趣向で紀伝体を枠組みにして仕上げた。『大鏡』を慈円も「コノ貞信公ノ御子ニ小野宮・九條殿トテヨハスメリ。此事ドモハ、世ツギノカガミノ卷ニコマム、トカキタレバ、」^{〔愚管抄〕}卷三——一五七ページとして「世継」の「鏡」として世の実相を叙述していく。『大鏡』が対象とした後一条天皇の在位する万寿二年（一二七〇）迄の治世を引き継いで、『続世継』すなわち『今鏡』の作者寂超は、保元の乱後の「武者ノ世」の具体相を韜晦しながら、嘉応二年（一二二〇）迄の治世を対象にした。その趣向は、『大鏡』の語り手である大宅世継の孫と名乗る老嫗を登場させ、

式部の君と申しし人の、上東門院の後宮と申しし時、御母の鷹司殿にさぶらひ給ひし局に、あやめと申して、まうで侍りしを、
〔序〕

自分は紫式部に「あやめ」の名で仕えていたと言ひ、長生きの血統のためか、現今まで生きながらえてきたので、その昔話をさせて、それを筆記していったとなつてゐる。『愚管抄』でも、保元の乱の勃発する前夜の鳥羽院の崩御する現場にいた平親範（一二三七～一二三〇）を登場させて、

マサシキ最後ニテヒキイラセタマイニケルトゾ人ハカタリ侍シ。其後チカノリ現存シテ民部卿入道トテ
八十マデイキテアリシニ、「カク人カタルハイカナリシゾ」トトイ侍ケレバ、
〔巻四——二二八ページ〕

とあつて、その往時の事を証言したと叙述している。この慈円の叙述姿勢からも、『今鏡』が語り終えた後を引き継いで、別所の西山の慈円園で原『平家物語』の『治承物語』を創出することは十分にあり得るであろう。本物語をみていこう。

嘉応二年の重盛の次男が鷹狩の帰途、摂政藤原基房の参内に行き会ったが、下馬の礼をとらなかつたので馬から引き下ろされる恥辱を受けた。その後、重盛が報復する。この事象より以降の平家一門の横暴から源頼朝が旗挙げして、壇ノ浦の海戦で平家を族滅するまでを治世を対象にした「世継物語」として本物語が創出される。本物語を企画した慈円は、建永元年（二〇〇）三月に甥である執政の「臣」の九条良経頓死、翌年四月には兄の兼実逝去したことで九条家の家運の後退をはかなんで西山へ隠棲する。承元三年（二〇九）三月の良経の女である立子の入内の慶事がもたらされることもあつて、気ままに振る舞える西山の空間で「あそび心」が湧出し、平家一門を族滅させる本物語の内実は「頼朝の物語」であつた。^{〔註7〕} そのかたちを遺存しているのは、『平家物語』の現存諸本では屋代本である。^{〔註8〕}

『今鏡』（藤波の下・第六・花散る庭の面）には、

大納言実定と申すなる。官も辞し給ひけ籠り給へるとかや。（中略）今様などもよくうひ給ふなるべし。籠り給へるもあたらしくはべることかな。^{〔二五八〕}

とあつて、永万二年（一一六五）八月、位階を人に越えられた時に籠居した際の実定（一一三九―一九二）が捉えられている。今様をうたつて気をまぎらわすこともあつたであろう。『今鏡』を創つた寂超は「もとにした資料に手を加えて変容することは極力避け、歴史を客観的に観察して、正確な史実を叙述することに努めている。」とされている。^{〔註9〕} 後年には『千載和歌集』に資料となつた私撰集『後葉和歌集』を寂超が編纂している姿勢と同質であつた。一方、『平家物語』成立について、山下宏明は「いすれかの編者、作者、もしくは作者群によつて書かれた、あるいは編纂されたものである。したがつて原本が存在したはずである。」との見解を披歴している。^{〔註10〕} 軍記物語研究の観点に立つて、『新古今集』と『愚管抄』との関連を掘り下げていこう。

本物語の一ノ谷の戦いで討死した薩摩守忠度の箴に付けていた歌である「行き暮れて木の下かげを宿とせば花やこよひのあるじならまし」には、ふとみかけた桜に美しい風情が描かれている、都落ちで引き返して藤原俊成の邸の門をたたき、一卷の家集を託して立ち去つた。俊成は後に『千載和歌集』を編纂する時に、家集の中から

一首を抜いて、詠み人知らずとして取り入れた名場面と対になっていよう。石田吉貞は「都を追われて各地をさまよい回った人間忠度の生に足跡を記せばそれは『平家物語』となり、その流離敗亡の悲しみを歌えば、それはこのような新古今的な歌となるのである。(中略)『平家物語』が新古今的であるということは、正しくは原『平家』についてだけいえることで、十二卷の『平家物語』は現実のあらゆる闘争や葛藤を取り入れることによって、もつとはるかに複雑なものになっている。」と論じている。^{〔註11〕}これは非常に重要な指摘ではあるまいか。石田の施線部の言説を、谷山茂が、

平家の興隆がもたらした若々しく華やかな現実的雰囲気は、若き日の定家らの直接体験ともなり、(中略) ここにはじめて新古今的妖艶美の世界が形成された……^{〔註12〕}

としている言説とを結合させていけば、後鳥羽院の治世での原『平家物語』の『治承物語』が透視されてくるだろう。慈円の史論である『愚管抄』に取用された歌をもとにみていこう。

『新古今集』(巻七・賀歌)には、後鳥羽院を寿いだ定家の、

わが道をまもらば君をまもらんよはひはゆづれ住吉の松

(七三九)

との一首が採られている。歌の守護神の住吉明神に我が歌の道を守るならば、それが政治の一環として歌を愛好し奨励されている院に治世を守る「道理」なのだと詠じた。『愚管抄』には、慈円が「後三條ノ聖主ホドニヨハシマス君」(巻四——一九九ページ)と讚美することになる後三条院の治世を俎上に載せるにあたって、

同五年二月廿日住吉詣トテ、陽明門院グシマイラセテ、関白御トモシテ、天王寺・八幡ナドヘマイリメグラセタマイケリ。住吉ニテ和歌会アリテ、御製二八、

イカバカリ神モウレシト思フランムナシキ船ヲサシテキタラバ

トアリケリ。ソノ中ニ経信ノ歌ニ、

ヨキツ風フキニケラシナ住吉ノ松ノシツエヨアラウシラ浪

トヨメルハコノタビナリ。

(巻四——一八八〜一九九ページ)

とあって、住吉社に於いて詠じた歌を載せているのは『愚管抄』全体からみても異例の一節なのである、史論には、これ以外に源頼朝の父の義朝の敗死をめぐっての落首である、

下ツケ八木ノ上ニコソナリニケレヨシトモミヘヌカケツカサ哉

(巻五——三三七ページ)

を載せてもいる。院と経信との歌の他に「頼朝の物語」を内実とする『治承物語』を取用して慈円が道理を説論していることを顧慮したとき、意味深長であろう。そこにはやはり『新古今集』の歌人としての側面をも顧慮せねばならない。さらに『後拾遺和歌集』(巻一八・雑)にも、

延久五年三月住吉にまるらせ給ひて、かへさによませ給ひける

後三条院御製

住吉の神はあはれと思ふらんむなしき舟をさしてきたれば

(二〇六三)

民部卿経信

沖つ風吹きにけらしな住吉の松のしづえを洗ふ白波

(二〇六四)

と載っている。本歌集は後三条院の第一皇子すなわち白河院の勅命によつて藤原通俊が単独で編纂し、応徳二年(二〇八六)九月に完成して奏上したものであった。周知のように、赤染衛門の散文的な歌や社交の場での贈答歌、中世的傾向の晴の歌、清澄な叙景歌すなわち『愚管抄』にも「心ノヲホクコモリテ時ノ景気ヲアラハスコトハ(中略)詩歌ノマコトノ道ヲ本意ニモチイル時ノコトナリ。」(巻七——三三三ページ)とある視覚的映像や絵画的イメージの歌を編纂した通俊は多数採択している。ところが、経信の『難後拾遺』の批難を受けて改訂して編纂が完了したのは翌年の寛治元年(二〇八七)八月であった。編纂した当人の通俊も、後三条院の住吉社行幸に侍して「今はとても今日帰るさを急げども心はとまる旅にまあるかな」とあるように住吉社帰途に際して参詣は印象に残ると詠じてもいる。当該の二首の歌は『栄花物語』(巻三八・松のしづえ)に収載されている。皇位を辞して信仰一途を目指したきたとの後三条院の歌は編纂者の通俊には「鮮烈であった」^{註13)}うえ、院を言祝いだ経信の歌について「深く感動」したのであった。

『愚管抄』の当該の二首について、留意せねばならないのは『栄花物語』(卷三八・松のしづき)に、

……住吉に参らせたまふ。「関白紅の出桂に柳の直衣奉りたりしこそ、いとをかしく、このたびの思ひ出なれば」と人申しけり。(中略)歌ども講ぜさせたまふ。

御製

住吉の神もあはれと思ふらんむなしき船をさして来れば

とある。まず後三条院の歌を配し、次に関白教通等の重臣の三首が連なり、経信の歌が、

左大弁経信

沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝しづえを洗ふ白波

とみえている。『栄花物語』続編の編纂者は、下句の「松の下枝しづえ」から『栄花物語』の巻名としたのであった。『十訓抄』のなかで経信は、凡河内躬恒に相對して相手にできるのは「わが『沖つ風』の歌こそあれ」(十ノ五)とあり、当該歌は経信の自賛歌であったと語られているし、俊成の『古来風躰抄』・定家の『近代秀歌』にもみえている。一方、『栄花物語』の後三条院の当該歌は、源経信の歌才を継いだ末子の俊頼が、自己の歌論の『俊頼髓脳』の「歌と故事」をめぐって次のように批評している。すなわち、

その心は、位にておはします程に、船に、物を多くつめれば、海を渡るに、おそりのあるなり。その荷を、取りおろしつれば、風吹き、浪高けれども、おそりのなきにたとふるなり。(中略)神仏の、よろこばせ給へば、住吉の明神も、あはれと思し召すらむと詠ませ給へるなり。(二五)

として、冥衆の感応をよび入れると讃えている。ところが上句の「住吉の神」の言辞が、前掲したように『愚管抄』では、「イカバカリ」となっている。慈田は『新古今集』の代表的歌人であったことに配慮して、変更意図を窺っている。

建久三年(一一九三)九月十三日詠「住吉百首」で、

祈るべし昔に帰るわが国をさてながらへん住吉の神

(二五九四)

と詠じて、昔の良き治世に立ち返って、そういう状態が永続することを慈円は念願し、

藻塩草敷津の波に朽ちぬともあはれは残せ住吉の神

(二六〇三)

俊成入道此百首歌を見てよめる

神もいかに心に染めて照らしけむ御法の後の言の葉の色

(二六〇四)

とあって、一六〇三番歌では冥衆である住吉明神への加護をも懇請する。そこで俊成は慈円の歌に感銘して、冥衆の明神は心底深く感じて照覧されることであろうと一六〇四番歌では和した。とするならば、歌人の史論であることに配慮したならば、前掲した『愚管抄』の「住吉ニテ和歌會アリテ、御製二八、」につづけて「イカバカリ神モウレシ……」との歌を叙述して、御製すなわち後三条院の歌では上句が「住吉の神」とあったのを『愚管抄』では「イカバカリ」と切り替えたことになるのではあるまいか。本歌取りの修辞が無意識にはたらいたと思われる。そのことを、さらに慈円圏の『栄花物語』享受の事実から、具体的に窺っていききたい。

『栄花物語』(巻三八・松のしづえ)には廟堂にかかわる人々の歌の数々をあげられ、最後には聡子内親王に仕えた女房の十三首が添えられ、

天降る神のしるしに君に皆よはひはゆづれ住吉に松

との歌があつて、明神の靈験のはからいで「君すなわち後三條院に寿命をお譲り下さいと祈念したのであつた。定家は、当該歌を殆どそのまま取り込んで、^{〔註14〕}前掲したように重厚な『新古今集』の七三九番歌「わが君をまもらば君を」を詠じたわけである。

『新古今集』には、

世をのがれて後、四月一日、上東門院、太皇太后宮と申ける時、

衣替への御装束奉るとて

法成寺入道前摂政太政大臣

唐衣花の袂に脱ぎ替へよわれこそ春の色は絶ちつれ

(二四八一)

御返し

上東門院

唐衣たちかはりぬる春の夜にいかでか花の色をみるべき

(二四八二)

とあつて、出家した藤原道長と一女彰子との贈答歌がみえている。一方、『栄花物語』(巻一五・うたがひ)に、

……大宮に唐の御衣に添へさせたまへる、

唐衣花のたもとに脱ぎかへよわれこそ春の色はたちつれ

大宮御覽じて、いみじう泣かせたまひて、御返し

唐衣たちかはりぬる春の夜にいかでか花の色を見るべき

(八)

があり、最高権力者の人間的な姿とその父の親愛の情に感涙している彰子が浮上している。すでに論じたように「うたがひ」の巻は、仏法王法相依の道理を揚言する慈円の立場と似かよつており、『愚管抄』の下地が作られている。『新古今集』一四八一番歌の「撰者名注記」では定家と家隆であつて、久保田淳は『栄花物語』に依拠していたと推定する。とすれば、定家は『愚管抄』が依拠した『大鏡』の先蹤となる「世継物語」にあたる『栄花物語』を披見していることになるはずである。これは看過できないことになる。

定家は『近代秀歌』のなかで、現今では平俗な歌になっていると批判をした一節に、

然れども、大納言経信卿・俊頼朝臣・左京大夫頼輔卿・清輔朝臣、近くは亡夫卿、即ちこの道を習ひ侍りける基俊と申しける人、このともがら、末の世の賤しき姿を離れて、つねに古き歌をこひねがへり。この人々の思ひ入れて秀れたる歌は高き世にも及びてや侍らむ。

(二)

としている。まず経信をあげているのは留意せねばならないだろう。次に俊頼から父俊成らの歌を古典時代の理想的歌風であつたと称揚している。つづけて『近代秀歌』の「八代集選抄」と「近代六歌仙」の項との二箇所、慈円が『愚管抄』に取り込んだ経信の歌をあげている。『詠歌大概』に「常観_二念古歌之景気_一可_レ染_レ心。」とあり、『毎月抄』にも「まづ景気の歌とて、姿・詞のそそめきたるが、何となく心はなけれども歌さまの宜しく聞ゆるやうをよむべきにて候。」とある。施線で景色を詠んだ伝統的な情趣・美観を漂わせる新しい当該歌を定家は中世和歌の先駆けとみなし、讃仰している。前掲したように『愚管抄』には仮名で歴史叙述をしているのは「真名

ノ文字ニハスグレヌコトバノムゲニタゞ事ナルヤウナルコトバコソ、日本國ノコトバノ本體ナルベケレ。ソノユヘハ、物ヲイヒツゞクルニ心ノヲホクコモリテ時ノ景氣ヲアラハスコトハ、カヤウノコトバノサハくトシラスル事ニテ侍。」(巻七——三二二(三三ページ)からなのだとし、六国史のような真名ではなく「世継物語」のように仮名で歴史を批評したとことわっている。『愚管抄』で、さらに慈円は後三条院と経信の当該歌のみを引いた直後には、

サテ同四月廿一日ヨリ御惱大事ニテ、五月七日御年四十トシニテウセサセ給ヒニケリ。カ、ル御心ノヲコリケルモ、君ノ御ワタクシヤヲホカリケン。我御身ハシバシモ御脱履ノ、チ世ヲバヤコナヒ給ハズ。事ノダウリハ又世ノスエニハ尤カ、ルベケレバ、白川院ハウケトラセヨハシマシテ、太上天皇ノ、チ七十七マデ世ヲバシロシメシタリケリ。
(巻四——一八九ページ)

として、波線部で後三条院には私心があつたと指摘して、院政を企図しながら具体的には実行できでないまま崩御したと批評したのであつた。それを波線部で道理とした慈円の意図は那邊にあるのか。

波線部の院への指摘と施線部の道理の言辞をめぐる文章に直結させて、あらためて、遡らせて「後三條院ノ位ノ御時、」(巻四——一八九ページ)すなわち在位当時の言行をめぐる説話を示しながら「大方理非クラカラヌ君」(巻四——一九〇ページ)と讚美して、荘園整理令の発布や延久宣旨柙の制定等を「コノ御沙汰バヤイミジキ事カナトコロ世ノ中ニ申ケレ。」(巻四——一九五ページ)世評を添え、撰閲家の藤原頼通との和合を物語の一場面を思わせる筆致で描き、頼通が院に対して「アハレナヲコノ君ハメデタキ君カナ。」(巻四——一九九ページ)と述懐したとして、「後三條ノ聖主ホドニヨハシマス君ハ、ミナ事ノセンノスエぐニヲチタ、ンズル事ヲ、(中略)撰録ノ家関白撰政ヲスゞロニニクミステントハ何カハヲボシメスベキ。」(巻四——一九九ページ)とあつて、院を施線のように「聖主」と礼讃したのであつた。『愚管抄』付録でも、

今ハタゞ脱履ノ後ワレ世ヲシラントヲボシメシテケリ。サレドコノ宇治ト後三條院トハサハヲボシメセドモ、アシカリケリくトミナ思ヒナヲシくシテ、王道ヘヲトシスエテ世ノマツリコトハヤミくシケル

ヨ、ナドミユ。

(巻七——三三四ページ)

と概括する。結局、時の執政の「臣」とも提携しながら、施線にあるように仁徳をもとに政治をしたのであつたと慈円は揚言しており、既述した物語の逆説的な修辭が史論に介在している。そのような観点も顧慮して見る必要があるだろう。そこにアンビバレンスの修辭が通底している。

そのうえ、『新古今集』編纂に深く関わつた代表的歌人であつた定家に配意したとき、『栄花物語』の聡子内親王に仕えた女房の「天降る神のしるしに君に皆よはひはゆづれ住吉に松」の歌の上の句を替えただけの「わが道をまもらば君をまもるらんよはひはゆづれ住吉の松」と定家が詠じるのは至当であることも付言しておかねばならない。

(二) 慈円と定家

慈円が『愚管抄』を叙述していた承久二年(一二三〇)当時に、定家は、

〔承久二年〕
同年九月十三夜、前大僧正のもとにたてまつる

おもかげにおほくの今宵夜しのふれと月と君とそかたみ成ける

(二六〇五)

と詠じている。今夜の月は永年に亘る多くの樂しかつた貴方との形見ですとの歌にたいし、

返事

うき身なほ月にならひてかたみならばかへして君を思いやる哉

との返歌を贈つた。その月は私の方こそあなたとの形見ですと慈円は和しており、二人には深い親愛の情が明瞭である。そこで慈円と定家との交わりに遡つて、みてみよう。安元二年(一一七六)、二十二歳の慈円は『初度百首』のうちの歌題「無常」で、

はかなくて過ぐるこの世を夢ぞとは覺めて後こそ思ひあわせめ

(八二)

との歌をとりいられている。夢から覚醒したら現世は続く夢のようだと中国古代の思想家である荘子の胡蝶の夢を念頭に詠じたのであつた。五年後、慈円より七歳若い定家は『初学百首 養和元年四月』に、

夢の内それとて見えし佛をこのよにいかで思あはせみ

(六七)

はかなくてすぐる此世と思しはたのめぬほどの日数なりけり

(七一)

と詠じている。六七番歌では夢にみた恋人の面影を現世でみたいとし、七一番歌では相手は会おうと約束した後、日は何と遅いことだと恋歌に切り替えており、明らかに慈円の歌に倣っている。

承元三年(二〇九)三月、甥良経の女の立子入内した九条家の慶事をもとに同年六月に『慈鎮和尚夢記』を起草し、そこには『愚管抄』で展開させる道理の雛形が披歴された。その後、建保四年(二二六)正月には、四天王寺別当の慈円に九条家の僥倖をめぐる聖徳太子の霊告がくだつた。慈円は霊夢をみたわけである。立子から懐成親王が生誕し、当親王の立坊(後の仲恭天皇)したのは建保六年(二二八)十一月、立子の弟である道家の三男頼経が四代將軍継嗣としていくのは承久元年(二二九)六月である。すなわち九条家の慶事が顕現する。聖徳太子の霊告を末代の道理として『愚管抄』別帖で揚言する。『愚管抄』別帖の跋文に及ぼせるにあつて「不力思ギノ君ノ御運、御案ノメデタサト、心アル人ハコレラノミメデタクゾ思ヒタリケル。」(巻六―三七ページ)とあるように後鳥羽院の治世を寿いで喜悅の情を露わにした。が、時局を率直に見据えた慈円は、『愚管抄』付録の間部にある諫言の文章では後鳥羽院の近臣らの策謀による討幕計画を率直に諫言して「今コノ文武兼行ノ撰録ノイデキタランズルヲ、エテ君ノコレヲニクマンノ御心イデキナバ、コレガ日本國ノ運命ノキハマリニナルヲトカナシキ也。」(巻七―三八ページ)とあつて悲嘆することもある。悲喜交々の思いを懐いて歴史叙述をしている。^{〔註19〕}

『堀川題百首』には定家が夢をみた歌が採られており、

暁の夢のなごりをながむればこれもはかなきあさがほの花

(三五〇九)

とあつて、妖艶な夢のなごりとして美しい朝顔の花を詠み、女と逢つた夢と朝顔の花とを二重写しにする修辭をこらす。当該歌をめぐって、赤羽淑は「夢に対する異常なまでの関心と、はかない美に対する情熱」があり、「夢

でもうつつでもあるような特異な言語空間を作り出している。」と批評している。^{〔註20〕}特に施線の「言語空間」の言辞は留意したい。それは太子の靈告が『愚管抄』のモチーフであり、道理を説諭するために「言語空間」を構築して説諭しているからである。^{〔註21〕}石田吉貞も「定家が夢を信じ、それについて一喜一憂してゐる」として^{〔註22〕}石田の二重施線の言辞は、これも前掲した『愚管抄』の文章に「メデタク」(巻三——一六九ページ・巻六——二九六ページ・「カナシキ也」(巻七——三四八ページ)とあり、ほぼ一致することになろう。

次に『愚管抄』と定家の日録と歌論から原『平家物語』の『治承物語』を窺っておこう。まず『愚管抄』別帖の跋文には、

末代ノ道理ニカナヒテ、佛神ノ利生ノウツハ物トナリテ、今百王ノ十六代ノコリタル程、佛法王法ヲ守リハテンコトノ、先力ギリナキ利生ノ本意、佛神ノ冥應ニテ侍ルベケレバ、ソレヲ詮ニテカキヲ侍ル也。

(巻六——三二七ページ)

とあり、『明月記』建保元年(一二二三)四月二十九日条には、

百王八十余代、神劍海に没して茲に并廻。事の理り然るべし。是れ則ち人力にあらざるか。

とみえる。『明月記』嘉祿元年(一二三五)六月十三日日条には、

又台嶺に蝶の雨(先先此の事の有り。必ず山上の大乱出で来る時なり。)只之を案ずるに、仏法王法滅亡の期なり。

道理と謂ふべし。

とみえており、『愚管抄』別帖冒頭では「昔ヨリウツリマカル道理モアハレニオボエテ、」(巻三——二九ページ)と説きおこし「王法仏法如二牛角。不レ可レ被レ滅……」(巻五——二五〇ページ)とあつて、慈円の揚言する道理の眞骨頂を定家は十二分に弁えていた。^{〔註23〕}

『愚管抄』別帖で原『平家物語』の『治承物語』を取用しながら道理を詳述した慈円は、別帖に続く付録に於いて「詩歌ノマコトノ道ヲ本意ニ用イル時ノコトナリ。」(巻七——三三三ページ)として、詩歌の内包する意味深い立場があることにふれながら、仮名の効用を説く。そして、「愚癡無智ノ人ニモ物ノ道理ヲ心ノソコニシラセン

トテ、假名ニカキツクルオ、……」(巻七—三三二ページ)としている。

『毎月抄』の序にあたる文章中に「毎月の御百首、能々拝見せしめ候ひぬ。」(二)とあって、毎月百首を届けてくる身分の高い歌道初心者(三代将軍源実朝とみなす説もあるが、確証はない。)への指南の意図を籠めて、定家は歌論を展開させていった。「時ノ君」(巻七—三四六〇・「近臣ノ男女」(巻七—三四〇ページ)をはじめ各階層の人々に説諭する『愚管抄』の方法と共通する。

(三) 定家の歌論から原『平家物語』の『治承物語』へ

『毎月抄』の枢要は周知のように、

さても、この十躰の中に、いづれも有心躰を過ぎて歌の本意と存ずる姿は侍らず。きはめて思ひ得難う候。とさまかうざまにてはつやつや続けらるべからず。よくよく心を澄まして、その一境に入りふしてこそ稀によまるる事は侍れ。

(四)

である。二重施線部で有心体が歌の本質に他ならないとして、十二分に自己の心を澄みきった状態になることをすすめた。施線部では「十二分に自分の心を澄みきった状態にして、一つの精神的境地に意識を投入させたのである」といい、想像力をはたらかせて、意識の上で感じとられ、考えとられた世界に入ること求めた。藤平春男は『毎月抄』は、いわば「艶」を「妖艶」として現在に甦らせるための創作のあり方を説いたのであり、「余情妖艶の躰」の持つ意味を考えていくと、結局定家の基本的な認識の立体的な性格が浮かびあがってくるという。そして、やはり「余情妖艶」と端的に言表したことももちろん重要であって、定家の歌の特色が物語的構想に認められることと照応している」とみなしている。「余情妖艶」とは、後述するように承元三年(一一〇九)に定家が源実朝に遣送本とした歌論『近代秀歌』に「余情妖艶の躰」とし、『新古今集』の歌風をあらわす歌論用語であるわけだが、波線部の「物語的構想」とした言辭は看過できない。そこで、さらに具体的にみてみると、尼ヶ

崎彬は「定家は、小説的状况を想定し、自らがその主人公に成り代わつて真情を吐露する方法をとつた。(中略) 紋切り型ではない思いを確実に伝えようとすれば、小説的設定をある程度説明しなければならぬという、僅か三十一字の文学では無理な要請である。周知の物語、たとえば源氏や伊勢の一節、王昭君などの故事を利用すれば面倒はないし、実際定家はしばしばこの「本説」利用をしている」として、有心体をもとに「主体的な想像の努力によって小説的主人公の心境に達し、その情念を我がものとして表現するものである」とみなし、施線にあるように定家の歌が「小説的」であることを繰り返しており、それを強調していたと論じている。^{〔註25〕}二重施線の「本説」利用すなわち本説取りの修辞は、『近代秀歌』より十年後、『毎月抄』を著わす前年の建保六年(一二二八)に『白氏文集』の詩句を題した『文集百首』に具現される。しかも『文集百首』の端書に「或上人、文集の詩を題にてよまむと思いたつことある」とみえており、本百首は慈円が企画して定家に参加を求めたのであった。具体的には慈円から句題とともに慈円の歌が付けられていたものがわたされ、慈円とは違う角度で出来得るかぎり、題詠歌として完成度を高めるために苦心惨憺しながら、物語的色彩の強い歌を定家は数多く詠じたのである。^{〔註26〕}その当時は、西山に慈円圏が組織され、慈円が企画した原『平家物語』の『治承物語』を創出している時期であった。

慈円圏に人材を呼集して編纂された本物語の内実は「頼朝の物語」である。その物語を「本説」にしなが、程なく『愚管抄』に於いて「頼朝八鎌倉ヲ打出ケルヨリ、片時モトリ弓セサセズ、弓ヲ身にハナツ事ナカリケレバ、郎従ドモ、ナノメナラズヲチアイケリ。」(巻五——二七一ページ)と「武」の本質を摘記し、上洛した頼朝が軍勢を率いる威勢を精彩に叙述する(その『愚管抄』の文章は後掲)。そのうえ官位昇進に頼朝は恬淡している態度を礼讃して「イカニモく未代ノ將軍ニアリガタシ。ヌケタル器量ノ人ナリ。」(巻五——二七一ページ)との寸言を添える。本説取りの修辞が史論の『愚管抄』にも援用されていく。^{〔註27〕}『愚管抄』が成立するのは、九条道家が摂政に就いた承久三年(一二三二)四月であった。

定家を慈円圏からみていこう。すると『吾妻鏡』承元三年(一二〇九)七月五日条には、

將軍家、御夢想によつて、二十首の御詠歌を住吉社に拝らる。内藤右馬允知親(好士なり。定家朝臣の門弟)

御使たり。この次をもつて、去ぬる建永元年御初学の後の御歌卅首を撰び、合點のために定家朝臣に遣はさるるなり。

との記事が載っている。三代鎌倉將軍の実朝は施線にあるように「夢のお告げ」によつて住吉社に歌を奉納、定家の弟子の知親が、使いとなつて下向していった。定家にその際に実朝は歌の添削をも定家に乞う。そのため『吾妻鏡』同年八月十三日条には、

京都より帰参す。京極中将定家朝臣に遣はさるるところの御歌、合點を加へ進ず。また詠歌口伝一卷を献ず。これ六義風體の事、内々尋ね仰せらるるによつなり。

とあるように、定家の添削した歌とともに施線の書すなわち歌論『近代秀歌』を実朝に献上したのであった。この条から定家は幕府に好感をもっていることが知られる。その後、定家は実朝と歌を通じてでも親幕派的になつていく。^{註20)}この一年後の承元四年(一二二〇)頃より、既述したように慈円は西山に有縁の人材を呼集して慈円圈を組織する。そして「いくさ物語」を創出し始めるのであるから、頼朝の構築した東国機構へ定家の志向とは相即することにもなる。そのことは、さらに『拾遺愚草』奥書の内容とも重なる。すなわち、定家は

先撰二百首之愚歌^一、有^二結番事^一。仍可^レ謂^レ拾^三其遺^一。又養和元年企^三百首之初学^一建保四年書^三三卷之家集^一。彼是之間、再居^二拾遺之官^一。故為^二此草名^一。

建保四年三月十八日書^レ之

参議治部卿兼侍從藤(花押)

と記載していたからである。施線部の定家が我が家集を編纂し終えた建保四年(一二二六)三月十八日は、西山の空間で「いくさ物語」の「頼朝の物語」を内実とする原『平家物語』の『治承物語』創出の最中である。これは本物語創出への定家の参画をみていくうえで、奥書の内容も意味深長であつたと判断されてくる。

(四) 物語作者としての定家の資質

源頼朝が没した翌年の正治二年(二二〇〇)七八月を上限として建仁元年(二二〇一)十一月を下限とする期間に『無名草子』が成立している。作者の俊成卿女は、「序」つづけて月・文・夢・涙・阿弥陀仏・法華経の項を設定、以下では『源氏物語』・『狭衣物語』等や歌集を評論している。その中に、

また、定家少将の作りたるとてあまはべめるは、まして、ただ気色ばかりにて、むげにまことなきものどもにはべるなるべし。『松浦の宮』とかやこそ、ひとへに『万葉集』の風情にて、『うつほ』など見る心地して、愚かなる心も及ばぬさまにはべるめれ。

(四六)

との箇所がある。施線で定家作の物語もたくさんあるといい、そのなかに二重施線で『松浦宮物語』にも言及して、「私」のような愚かな心には到底及ばないとして、終章の末尾は、

……『世継』『大鏡』などを御覧せよかかし。それに過ぎたることは、何事かは申すべき」と言ひながら。

(六四)

との言辞であるので、余韻嫋嫋であつた。寂超作の『今鏡』を直視して本物語を企画・創出させていった歌人の慈円の姿勢とも若干は類同することになろう。

定家は「新儀非抛達磨歌」と批難されながらも新風の模索をしていた建久元年(二一九〇)秋の詠「花月百首」には、

月きよみねられぬ夜しももろこしの雲の夢まで見る心ちする

(六九五)

があつて、月が清いので眠れない夜は、中国の雲夢の浦の夢を見る心地がすると詠じている。当該歌は『松浦宮物語』とともに浪漫的中国志向が窺われ、『白氏文集』をはじめ『伊勢物語』・『源氏物語』・『狭衣物語』等の物語からの影響をうけながら、自らの和歌世界を拡充していく意欲が窺えるのである。本説取りの修辞を凝らす定家の詠歌姿勢をも同時に介在させながら、定家の試作の物語類をも念頭に置いて前掲した『無名草子』で施線

のように「あまたはべる」と作者の俊成卿女は記したのではあるまいか。

『無名草子』作者は周知のように、定家と同腹である八条院三条の娘とされてきている。俊成の孫であるわけだが、それを「俊成卿女」の名称にしているのは一代の歌道の大家である俊成卿の後を継ぐべく「御子左家一門の輿望が託されてもいた」^{〔註30〕}からであった。二十歳で作者は源通親の次男の通具と結婚する建久元年（一九〇）頃まで、定家と京の五条の俊成邸に住んでおり、「新しい歌風を起すために苦闘に身を挺した重要な時期（中略）年若く野心的な叔父定家の熱意」にほだされていた^{〔註31〕}。同時に「定家の指導の下におかれている。（中略）伊勢・源氏・狭衣物語の歌を重層させた詠作が少なくない。」とされている^{〔註32〕}。定家にとっては姪にあたる作者の「俊成卿女」に親愛の情を抱いているのはたしかであった^{〔註33〕}。

建久元年（一九〇）当时には『松浦宮物語』がすでに成立しており、前掲した『無名草子』の文章の二重施線にあるように『宇津保物語』と匹敵する物語であると『松浦宮物語』を評価している。父の兄弟姉妹には藤原成親・藤原師光（西光・平重盛室）^{（その子が入水する維盛で、本物語に其の維盛入水ことが描かれている。それ故、看過できない。後述する。）}がいて、その過酷な運命を十歳から十五歳の彼女は身につまされながら、聞き耳を立てていた。源平争乱の時局の模様を俊成邸で定家と深刻に語りあっただろうし、定家創作の物語類も俊成卿女は熟知したと推測できよう。建久九年（一九八）夏に詠まれた『守覚法親王家五十首』末尾には、定家の、

眺望二首

かへり見るくもよりしたのふるさとかすむ梢は春のわかくさ

（二六七七）

わたのはら浪とそらとはひとつにている日をうくる山のはもなし

（二六七八）

が据えられている。定家は一六七七番歌では、『和漢朗詠集』（巻下・眺望・六二六）にみえる、

天台山の高巖を見れば 四十五尺の波白し

長安城の遠樹を望めば 百千万莖の薺青し

とある雄大な光景の詩句をもとに、峯の頂の高台から下界を見下ろす趣向をこらした。一六七八番歌については、

赤羽淑によると「海上の水平線上に、あるはずもない山の端を想定して、(中略)しかもありありと目に見える幻想性へもつながってゆく。それは虚像であつても(いま、ここに)という抒情主体の視点が原点となる」ということで、物語的な場面をもちながら、(中略)定家の視角のもう一つの特徴は、(いま、ここに)という主体の視点と対象との出逢いの瞬間を一首のモチーフとしている」と論説している。施線の言辞は、したがって「慈円は時宜相応に作り替えられていく道理を「假名ノ戯言」を用いて説き、人を「今ここ」に参加させていくのが「愚管抄」の方法」であつたことも呼応してくる。しかも『愚管抄』に取用された原『平家物語』の『治承物語』を遺存している現存の文章には「……霜隔テ月浮ニヘリ海上ニ。分ニ極浦浪、引レ塩行船ハ、半天ノ雲ニサカノボル。」(屋代本巻七「平家二門落都趣西国事」との字句がみえている。美辞麗句を駆使して彫琢した本物語とも類同してくる。そのことはすなわち、本物語は西国へ向かつて船出する平家の軍勢が「霜に隔てられ、月はその海上にその影をおとし、遠く離れた浦々の波をかき分け、潮に曳かれて漂う平家の船が、ちょうど中空の雲の中にさかのぼって行くようにみえる」であるとの意味になる。屋代本『平家物語』の施線の「引レ塩行船ハ、半天ノ雲ニサカノボル」と抒情的詠嘆的に哀感をもたせながら描出している一句は、定家の一六七八番歌の「浪とそらとはひとつ」と確かに近接しているからである。

文治三年(一一八七)、三十三歳頃に慈円が詠作した『堀川百首』(雑二十首)には、しかも、

漕ぎ出でて果てなき海をみわたせば先だつ船の雲に消えぬる

(二八九)

との歌があつて、やはり定家の歌そして本物語とも呼応していた。双方の深い紐帯が看取されてくる。

建久九年(一一九八)夏の定家詠である『守覚法親王家五十首』から『新古今集』に撰入された「春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るる横雲の空」(三三八)は『源氏物語』最終巻名とその内容である、尼となって繋がり切れた浮舟を思う悲しみの物語を典拠にしていた。当時三十七歳であつた定家は、『源氏物語』の「薄雲」巻で藤壺の享年に一致しており、光源氏の嘆息を踏まえつつ、我が母である加賀との永遠の別れの事実をも重層させた^{〔註36〕}。本説取りの修辞であつたのである。そこには、同時に建久七年十一月の政変によって九条家の家運が後退

し、隠忍自重を強いられる定家の悲運の実相をも踏まえていよう。守覚法親王から本五十首歌の詠作を求められたのは前年の建久八年十二月五日であった。華やかな廟堂での新しいチャレンジを続けていた定家は自己と向き合い、これまでの華やいでいた頃と現今とを引き比べる日々を迎えていたわけである。この不遇期こそが、往年に批判された「新儀非抛達磨歌」から脱し、妖艶な歌風へと深化させていく好機^{〔註37〕}の到来であった。後年、『徒然草』(第五段)で顕基中納言が「配所の月を、罪なき身でみたいものだ」と吐露した言葉が想起されよう。他動的な原因によつて失意の境遇に陥つて、自己発見の端緒をつかみ、精神的に成長をするからである。

歌人として飛躍するうえの錬成と人間として成熟するための時期にあたる建久年間(一九〇〜一九六)中頃、政変前か政変後かは今のところ不詳であるものの定家は『物語二百番歌合』を編纂している。これは『百番歌合』(『源氏物語』・『狭衣物語』を引き合わせた歌合)と『後百番歌合』(『拾遺百番歌合』)の二編からなり、その構成のために「創意工夫を凝らした編纂がなされるが、特に場面を尊重する度合いが大きい。(中略)読み手は歌が象徴する場面を平行して想起し、それらと比較することになる」との指摘がある^{〔註38〕}。定家は物語歌を公儀性の強い文芸形式である歌合に取り込み、再構成している挑戦的な戦略なのであった。当然のことながら、物語中の人物の属性や場面をも含めて、本歌取りよりも歌の収められている元の物語へもどることが容易になる工夫を凝らしている。その一例をみると、

二番

左 弘徽殿の三の口にて、朧月夜の尚侍に

深き夜のあはれを知るも人る月のおほろけならぬ契りとぞ思ふ

右 大将におはせし時、弘徽殿にて、女二の宮に

死にかへり待つに命ぞ絶えぬべきなかなかに頼みそめけむ

とある。左歌では『源氏物語』(「花宴」)では、宴の後に源氏が、

「朧月夜に似るものぞなき」と、うち誦して、こなたさまに来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へるけしきにて、「あな、むくつけ。こは誰ぞ」とのたまへど、「何かうとましき」

とて、

深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ

とて、やをら抱きおろして、戸は押し立てつ。あさましきにあきたるさま、いとつかしうをかしげなり。とあつて、朧月夜に逢つて、「あなたが、夜更けに情趣がおわかりになるといふのも、私に逢うといふ並々ならぬ前世からの約束があるからです」と詠じた場面をもとにしている。そこには『新古今集』に採られた、

文集嘉陵春夜詩「不_レ明不_レ暗籠_レ々月」といへることよみ侍りける

大江千里

照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき

(五五)

との歌が定家の念頭にあつたであろう。寛平六年(六八四)に宇多天皇の勅命で詠じた大江千里には周知のように人生の悲哀や沈淪の歌が多く、当時の定家は『白氏文集』を通じて唐土の治世と建久七年の政変後の政治の動向を引き合わせることもあつた。要するに不遇をかこつている定家は時間だけではなく、空間の壁もなくなり、程なく和歌所の寄人になつたとき、定家は五五番歌の撰定に一役買つて出るこゝになつたと推定できよう。とすれば、あくまで憶測にすぎないが、両歌合うちの二番左歌を含んでいる『百番歌合』の方は建久七年(一一九六)の政変後であつたのではないだろうか。

右歌については、『狭衣物語』(巻二)では主人公の狭衣が女二の宮を奥の座敷へひきいれる場面に、

やをら寄りて、奥の御座に少しひき入れたてまつりたまふに、思しあへず、「こは誰そ」と言はれたまふ御けはひ、世に知らずらうたげなり。

死にかへり待つに命ぞ絶えぬべきなかなかに頼みそめけむ

とのたまふ御けはひを、いみじき御心まどひにも、この人とや聞きしらせたまひけん、いとど恥づかしういみじきに、ものもおぼえたまはず、……

(八四)

とあり、二の宮の愛らしい姿に狭衣は惑乱して自制心を失つて契りを結ぶと描かれていく。『源氏物語』と同じ

ように思いがけない逢瀬を主題にしている。

左の詞書では「弘徽殿」・「三の口」・「朧月夜の尚侍」の言葉が記載され、『源氏物語』の光源氏と朧月夜との逢瀬の場面であることが想像される。『狭衣物語』に於ける「大将」・「弘徽殿」・「女二の宮」の言葉から、詠歌の場面は「弘徽殿」で契りを結ぶに至る女への男の恋歌である。したがって、本歌合の享受者は、これら言辭を念頭に置いて、その名場面を描いている『源氏物語』・『狭衣物語』の世界へ参入していく。要するに「読者は歌が収められていた物語の内容までも取り込み、「物語二百番歌合」の読書を楽しむ」のである。^{〔註39〕}

これは歌の修辭である本説取りと基本的に同一であつて、原『平家物語』の『治承物語』創出の「あそび心」のモードと同一であろう。

(五) 定家の紀行から『松浦宮物語』そして平家一門都落ち

慈円が企画した原『平家物語』の『治承物語』が編纂されている頃の建保年間(一一二二—一三一九、承久に改元される一一二九年四月)になると、定家の歌境は象徴的な深みを見せ、本歌とは異なる「幻想的な風景(中略)洗練が加えられ(中略)果敢な言語実験を試み」^{〔註40〕}をさかんにしていた。前章に掲出した屋代本『平家物語』の文である「引レ塩行船ハ、半天ノ雲ニサカノボル。」の直前には、

昨日ハ東山ノ関ノ麓ニ、並レ轡ヲ、今日ハ西海ノ浪ノ上ニ、解レ纜。雲海沈々トシテ、晴天將レ暗ニ孤島一。
霜隔テ月浮ニヘリ海上ニ一。

との美辭麗句が刻まれている。この言辭に着目して定家との関連を窺つてみたい。

『明月記』建曆二年(一一三二)正月二十一日・二十二日の兩条の全文をまず、掲出してみよう。すなわち、

廿一日。辰の時に雨降る。終日濛々たり。天明に華洛を出で、孤舟を棹す。雨脚滂沱たり。漸く黄昏に及ぶて、神崎の小屋に着く(静快律師、同じく此所に宿す)。

沙堤雨の裏行人少なし。纔に漁舟を伴ひて宿を問ひて来たる 月黒く雲陰りて徐ろに夜ならんと欲す
猶江水を望みて独り徘徊す

はるさめのあすさへふらばいかがせんそでほしわぶるけふのふな人

廿二日。夜、雨休む。暁に風寒し。未明、月に乗じて路に赴く。

月斜に霞深くして春尚浅し 山雲初めて曙色徐ろに分る

野村の雨後何ぞ望を遮る 只早梅の風底に薫る有り

昆陽池を過ぎ、武庫山に入る。

新雨初めて晴れ池水満つ 恩波風緩かにして豊年を楽しむ

遠松我を迎ふる親故如し 群鳥人を驚かし争ひて後先す

暁涙を伴ひて来たる江館の月 春望相似たり洞庭の天

頭を廻らし遥かに顧みる青巖の路 漸く帝都を隔つ山復川

武庫河大い溢れ、人通ずるを得ず。遥かに下流を尋ね、蒙を衝きて田を渉るの間、時刻推移す。水を濟る者、膺に騰る波を徹す。況んや亦巖路崔嵬、険阻を踰して越え、荆棘を修剪し、山を披きて路を通ず。申の刻に及び、温泉の孤館に着す。即時に浴を始む(仲国朝臣の湯屋に宿す。二品の消息に依り之を借与するなり)。

とある。定家が有馬温泉へ湯治のために出かけていく途中の模様なのだが、さながら物語に描かれた一場面の趣を醸しだしている。漢詩の施線の「月黒く雲陰りて」・「月斜に霞深くして」・「頭を廻らし遥かに顧みる青巖の路」等の詩句は、前掲した本物語にみえる「解纜。雲海沈々トシテ、晴天將暗孤島」。霜隔テ月浮ニヘリ海上ニ」と同じ語調ではあるまいか。二十二日条の二重施線の「月に乗じて路に赴く」とある地の文や詩の「梅の風底に薫る有り」の句は、『新古今集』に採られた『守覚法親王家五十首』での、

おほぞらは梅のほひにかすみつゝくもりもはてぬ春のよの月

(二六三)

との歌ときわめて近似しており、妖艶な春の夜を見事に詠じた定家の姿勢は日録にそのまま投影されている。本

物語創出に定家の参画を探るうえからも看過できないであろう。

原『平家物語』の『治承物語』が遺存しているのは屋代本『平家物語』である^{〔註4〕}。そのことを、あらためて確認して、定家が創つたとされている『松浦宮物語』との関連を探っていこう。

嘉応二年(一一六九)、執政の「臣」である藤原基房と平資盛との衝突という王法の動搖を知らながら寂超は『今鏡』を括つたあとを引き継いで、本事象すなわち「殿下乗合」の物語より原『平家物語』の『治承物語』は展開させていく。周知のように「殿下乗合」の史実^{〔註5〕}は父重盛であったのを、孫の資盛の仕返しをする清盛と組み立て直した。『愚管抄』では、清盛の暴挙として虚構した本物語を対置して「父入道方教二ハアラデ、不可思議ノ事ヲ一ツシタリシナリ。子ニテ資盛トテアリシヲバ、……」(巻五——二四六ページと注記し、史実に沿って本事象を摘記しながら「コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテアリケルニコソ」(巻五——二四七ページと再説する。治承四年(一一八〇)八月の頼朝の旗揚げの顛末を詳述したあと、「清盛ハ(中略)彌心オゴリツ、カヤウニシテアリケレド、東國ニ源氏オコリテ國ノ大事ニナリニケレバ、……」(巻五——二五三ページ)としている。「殿下乗合」の事象があつた時期の嘉応二年より十年の隔たりがあるものの、施線部で清盛を「オゴレル」人と慈円は指弾した。以下での叙述では、平家一門を討つて「武者ノ世」を領導する頼朝を「冥蹟二法」の道理から捉えていく^{〔註6〕}。「殿下乗合」の「蹟」の動搖につづけて本物語も「冥」の側から平家側の武士の悪行を語っていく。すなわち、武士の射た矢が十禅師の神輿に立ち、多くの死傷者が出たため、山門の衆徒は神輿を放置して帰山した。放置された神輿は、前例に任せて祇園社に入れることになった。そのことを、

保延四年二神與入洛ノ時ハ、祇園別当ニ仰テ祇園ノ社ヘ奉レ入レル。今度ハ保延ノ例タルヘシトテ、彼社ノ別当権大僧都澄憲ニ仰テ、乗燭ニ及テ奉レ入レル。
(屋代本・巻一「日吉神與入洛事 付頼政振舞事」)

としている。延慶本等には当該の一節はない。しかも今一例、安元三年(一一七七)八月四日に治承に改元 五月五日に明雲は天台座主を辞任したので、山門の大衆は憤り、強訴の噂に洛中は騒然となる。同月二十日、西光父子の讒言で明雲は流罪となり、三日後の配所へ明雲が出発する時に、大衆は師を送つて粟津の国分寺毘沙門堂に至り、

屋代本には、

祇園別当澄憲法印、其比未権大僧都ニテ御坐シケルカ、名残テ奉_レ惜、泣々梁津マテ送奉_レラル。自_レ其澄
憲暇申テ被_レ返ケルニ、明雲僧正年来己_コ心中ニ残サレタリケル天台円宗秘法、一心三卷ノ法門并ニ血脈相
承ノ譜ヲ授ラル。此法ハ釈尊ノ付属ヲ、波羅奈国ノ馬鳴比丘、南天竺ノ竜樹菩薩ヨリ次第二相伝シ来レル
ヲ、今日ノ情ニ澄憲ニ是ヲ受ラル。我國ハ粟散辺地境、濁世未代トハ云ナカラ、澄憲ヲ付属シテ、法衣ノ
袂ヲ押ヘツ、被_レ返ケルコソ哀ナレ。
(屋代本・卷二「先座主明雲罪科儀定 同配流事」)

とあつて、施線にある「一心三卷ノ法門并ニ血脈相承ノ譜」をも授けたとなつてゐる。しかも延慶本・長門本・南都本にはやはり当該の一節はなく、右文は安居院流の唱導の手になるものであり、屋代本の施線の言辞が正しいとの指摘がなされている。^{〔註釋〕}前掲の二つの文章中の二重施線「澄憲」は安居院流の祖、「澄憲」の子が聖覚であるのは重要視せねばならない。後述するように聖覚は永年に亘つて定家と親交を結んでおり、本物語の創出との関連から「澄憲」をめぐる二つの文章は極めて示唆的である。それについては後述したい。

『明月記』元久二年(二二〇五)閏七月二十一日条に、

廿一日。昏黒、高倉院督殿の宿所に行き向ふ(皇后宮御母儀)。日來病惱、時を待たるの由を聞く。年来、此の辺りに於て、聞き馴るるの人なり。仍て之を訪ふ。女房出で逢ふ。即ち宿所に皈る。

とあつて、小督が洛中の居宅に重患に伏してゐるので定家が見舞つた。屋代本には、

小松殿薨セラレテ後ハ、様々人ノ心モ替リ、不思議ノ事共多カリケリ。其比中宮ノ御方ニ、小督殿トテ勝レタル美人、箏ノ上手候ハレケリ。主上夜々召レケリ。
(屋代本・卷三「小督局事」)

とある。重盛薨去、高倉院に召しだされて寵愛されてゐる小督を、その後知つた清盛は怒り、嗟峨に身を隠し、ついに小督は大原で出家、そのこともあつて高倉院崩御に及んだと展開させた。「小督局事」の直前にある「同内府病惱事同死去事」の章段には「天性此ノ大臣ハ未来ノ事ヲモ兼テ知給タリケルニヤ、……」とあつて、平家一門の運命を知つてゐる重盛を正面に押し出し、混迷する廟堂の内情から旗揚げする頼朝へと語りすすめてい

く。重盛薨去の後に「七月七日大地震事」の章段が布置され、「冥」側から仏法と王法との動揺が伏線として仕組まれているわけである。本章段に直結させて、後白河院と清盛との対立に及ばせた。後白河院に、

竜顔ヨリ御涙ヲ流サセ坐ス。誠ニ天下ノ御事ハ、君ト撰録トノ御計ニテコソ有ヘキニ、コハ如何ニシツル事共ソヤ。天照大神、春日大明神ノ神慮ノ程モ難レ量。
(屋代本・巻三「入道相国奉恨朝家事同悪行事」)

とあるように宗廟神・社稷神にふれていることから明白である。一方、「冥顕二法」の道理に則っている『愚管抄』には、平重衡の南都焼亡の事象をめぐって、慈円の兄の九条兼実が、

……左右大臣ニテハ経宗・兼実多年ナラビテオハシケル、右大臣オモヒキリテ、「一定謀叛ノ證據ナクテ、サウナクサ程ノ寺ヲ追討ハサラニエ候ハジ。就レ中春日大明神日本第一守護ノ神明也。王法佛法ニ如牛角一。不レ可レ被レ滅」之由、愚詞ヲ申サレニケレバ、……
(巻五——二五〇ページ)

とやはり述懐したとある。本物語と軌を一にしており、さらに末代の道理として九条頼経が將軍繼嗣となつた事象を批評している付録の文章にも、

太神宮・八幡大菩薩ノ御ヲシヘノヤウハ、「御ウシロミノ臣下トスコシモ心ヲオカズヲハシマセ」トテ、魚水合體ノ禮ト云コトヲサダメラレタル也。コレ計ニテ天下ノヲサマリミダル、事ハ侍ナリ。
(巻七——三一九ページ)

とある。『愚管抄』の「冥顕二法」の道理から本物語とは相即している。

本物語が主題にしている廟堂の雰囲気を横溢させる典型例は「月見」の章段であつて、今様をうたう徳大寺実定の形象は西山の慈円圈で創出している。^{〔註44〕} 富倉徳次郎は、「十二巻本の古態を伝えると考えられる「屋代本」を見ると、覚一本に近いが、そこには後徳大寺実定と大宮との対面の場がないことが注意される。^{〔中略〕} 源氏物語の宇治十帖を引き、その影響の濃い、実定大宮の対面の場が、増補されたのである」と見なした。^{〔註45〕} 延慶本でも、

実定卿御心ヲ澄シテ、腰ヨリアマノ上丸ト云横笛ヲ取出シ、平調ニネトリ、右京ノ有様ヲ今様ニ作り、歌

ヒ給ケリ。

(延慶本・二中・三一「実定卿待宵ノ小侍従ニ合事」)

とあり、実定と大宮とが対面している。やはり『平家物語』の諸本のうち屋代本が原『平家物語』の『治承物語』のかたちを遺存している証憑になつてくるだろう。

その後、本物語は「武」の抗争そのものへ及ばせていく。そこで定家の創作とされている『松浦宮物語』との関連を窺つていこう。

寿永二年(一一八三)六月一日に木曾義仲が俱利伽羅谷へ平家軍を追い落とす策略をたてて、新八幡宮に願書を奉納した場面をみてみよう。屋代本には、木曾義仲が「冥衆」の加護がえられるならば、その前兆をお示しく、さいと祈つて願書を八幡大菩薩に奉納したところ、

八幡大菩薩真実ノ志シ無^レニツツヤ遙ニ照覧シ給ケン、雲ノ中ヨリ鳩ニ飛来テ、翻^ニ翻源氏ノ白幡ノ上ニ。平家モ是遠見シ、皆身毛堅ケリ。

昔シ神功皇后攻^ニ新羅^一給シニ、靈鳩明天アラハレテ、軍ニ得^ニ勝事ヲ^一給ヘリ。而ニ此人々ノ祖先八幡太郎義家、奥州ニテ貞任追罰ノ時、栗矢河ノ館ニテ、向^ニ王城方^一ニ遙ニ奉^レ拜^ニ八幡ヲ^一、「是ハ非^ニ私ノ火ニ^一、即神火也」トテ放^レ火ヲ、靈鳩頭^ニ炎中ニ^一、飛^ニ超旗ノ上^一。加様ノ先跡ヲ思ツ、ケ、木曾今甲ヲヌキ、拜^ニ靈鳩ヲ^一給ケン心ノ中コソ憑モシケレ。

(屋代本・巻七「木曾於垣生若宮願書事」)

とある。神功皇后が祈請したので、靈鳩があらわれて、勝利したとの故事が引用されている。この一節に着目した森晴彦は、『松浦宮物語』の唐帝崩御後に皇位継承権獲得のために三万の軍勢を率いたことを定家が構想したのは、『大日本国法華経験記』に次のようにある説話、すなわち、

僧都急の事ありて、山階寺より京に上るに、淀河に着きぬ。悪き風頻に吹きて、河浪極めて高くして、船往還すること能はず。僧都急の事あるに依りて、船に乗りて河を渡るに、衆人驚怖して皆言はく、船漂倒するときには、僧都当に沈むべしといへり。歎き恐るるの間、天童十人計、河の中より出で来たりて、船を捧げて水に泛ぶに、浪に寄らずして、安穩にして岸の上に着き竟りぬ。

(巻中・四二)

が典拠であるとみなした。そして森は「既知の説話の類型が作者執筆の折、無意識に投影することが考えられる」として、「神仏に祈念し、困却した時、分身の神兵が現れ、計十人の氏忠の活躍によって形勢不利・敗戦濃厚の戦いを逆転勝利に導く」という筋が『平家物語』の神功皇后譚とも同じであること、(中略)神功皇后譚が『平家物語』の屋代本・覚一本にしか見えない事や、(中略)「困却した時、救済者(神・仏)が現れる」と云う類型のプロットこそが最大の影響を与えているかもしれない点であろう。『松浦宮物語』も『平家物語』も同じくその線上にある」と論じている。特に二重施線で「『平家物語』の屋代本・覚一本にしか見えない事」との森の言説は看過できない。木曾義仲が「冥衆」の加護がえられるならば、その前兆をお示しく、ださいと祈つて願書を八幡大菩薩に奉納した一節は屋代本に、やはり原『平家物語』の『治承物語』を遺存している証憑になると思われる。そして施線で『松浦宮物語』と本物語が同じ線上にあるとしている森の指摘は、定家の本物語への参画をみていくうえで参考になる。

屋代本の巻七「平家一門落都趣西国事」の冒頭にある「明レハ七月廿五日ナリ。」の言辞より、「薩摩守忠度ハ、何クヨリカ引返サレタリケム、侍五六騎具テ、五条三位俊成卿ノ宿所ニ打寄テ……」と展開させ、平忠度が定家の父の俊成に家集を託して都を落ち、やがて戦死してしまつたと語り、その後、『千載集』が編纂される時に、詠み人知らずとしてとりいれたとして「口惜カリシ事共ナリ。」とした。周知の話柄である。それ以外にも、武門平家の人々の哀切な別離の諸相を様々に語り上げたあとに、本章段「平家一門落都趣西国事」の末尾は、

……只尺セヌ物ハ涙ナリ。浪ノ上ニ白キ鳥ノ群居タルヲ見テハ、彼在原ノナニカシノ、住田河ニテコト問ケム、名モムツマシキ都鳥哉ト哀ナリ。寿永二年七月廿五日ニ、平家都ヲ落ハテヌ。

となつている。二重施線の日付は冒頭のそれと照応しており他の日とは異なる特別の日であった。京で威勢を誇つた平家一門の世は終わったことを印象付けていよう。尽きない抒情を一気に断ち切り、かえつて深い感動を喚起させることにもなる。しかも施線部には「伊勢物語」(九段の「東下り」)をした主人公と目される在原業平の「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしや」との歌を含む物語を簡約に採りこんでいる。

本説取り修辭が介在しているわけである。その理由の一つには次のような理由も顧慮されよう。

西山の空間では、「小塩ノ里 在善峰ノ麓」の箇所が塩竈の遺跡にふれ、「傳へ云フ在原業平ノ朝臣塩屋ノ愛ニ景色一取ニ難波ノ海水一令レ燒所ナリト……業平ノ塔 在ニ同所西方……又在原業平ノ母長岡住コト載ニ伊勢物語二(三州名跡志)とあつて、西山には業平の歌等を志向する雰圍氣が醸し出されていた。業平の歌をもとに文飾した直前には、前掲の本物語の「……霜隔テ月浮ニヘリ海上ニ。分ニ極浦浪一、引レ行船ハ、半天ノ雲ニサカノボル。」と定家の二六七八番歌の「わたのはら浪とそらとはひとつにている日をうくる山のはもなし」と類同するのは、西山の慈円圈での定家の本物語創出参画をみていくうえでやはり参考になるであろう。

(一八) 「あそび心」をめぐって

西山隠棲をした慈円の直接の動機として、建永元年(二二〇六)三月に甥の執政の「臣」の良経の頓死、翌年の承元元年(二二〇七)四月には兄の兼実の長逝があり、我が九条家の家運の後退をはかなんだからでもあつた。その後、承元三年(二二〇九)三月、良経の女である立子の入内の朗報があつて、『愚管抄』の雛形となる『慈鎮和尚夢想記』を草して、程なく「あそび心」から『平家物語』の『治承物語』を企画・創出させていく。すなわち、慈円圈が組織されたのである。^{〔註48〕}

定家はその時期に、

同四年九月粟田宮歌合 干時辞職

寄海朝

和歌の浦やなぎたる朝のみをつくし朽ちねかひなき名だにのころらで

おなじころ

なきかげのおやのいさめはそむきにき子を思みちの心よわさに

(二五七五)

(二五七七)

と詠じている。前の歌では廟堂歌壇において無用となった我が身を悲嘆し、後の歌では子の為家の将来を思う恩愛の道に迷いつつ、亡父俊成の庭訓に背いている自己の苦衷をこめた。当時の定家は、不遇者意識をつのらせていたのである。^{〔註48〕}その後、建保二年(二二四)二月に定家は参議、四年(二二四)十二月には正三位に昇進した。蹴鞠の才によって寵遇を受け、学問や歌作の修練を怠つていた為家に親として危惧の念を抱くこともあった。が、侍従・左少将・左中将・藏人頭となつて、ついに正二位権大納言、民部卿の高位に為家は至る。主家の九条家の浮き沈みが大きく影響している定家をめぐつて、村山修一は、人一倍感受性強く生まれついており、『愚管抄』で披歴した思想の数々も受け取つていて、^{〔註49〕}「愚管抄」に鮮やかに説明されているところであるが、慈円と親交のあつた定家もまたその教えをうけたであろう(中略)潜在意識として心の奥底にたえず往来するところとなつた」と論じ、定家は「幻想的世界に遊び、象徴的作品の極地」へ入つていつたと指摘している。^{〔註50〕}施線の「遊び」の言辞は原『平家物語』である『治承物語』を企画・創出し慈円圈「あそび心」とも呼応する。^{〔註51〕}

歌人の高野公彦は、自己の詠作体験をからませながら、『明月記』をもとに独特の定家論を展開させており、そのなかで「さて右の「老若五十首歌合」が開催された建仁元年(二二〇)頃の中句であつた。(中略)このころから院が意識的に定家を身近に用ゐるようになったのである。(中略)院は遊び好きな人間である。」として、さらに具体的に、

定家にとつても和歌は心の遊びであつただらうが、しかし同時にそれは職業であつた。院の好んだ種々の遊びには無関心な、きまじめな歌詠みにすぎない。院のやうな多面的人間に随行して一日中、いや何日もそばに待つてゐるのは、歌の家を背負つて生きなければならぬ歌詠みといふ一面的人間には苦痛であつただらう。ストレスは、溜り通しであつたに違ひない、定家は何によつてそれを解消したのか、私にはよく分からない。定家はあまり酒は飲めなかつたつたやうだ。あるいは、明月記といふ日録を克明に記すことが最大のストレス解消法だつたのかもしれない。^{〔註52〕}

との寸言を添えた。定家が歌を詠むことを施線で「心の遊び」と判断し、二重施線では、後鳥羽院の詠歌の姿勢

とは異なる定家にとっては「苦痛であつた」・「ストレスが溜まり通し」と忖度して、『明月記』そのものを日々
に記すことが気休めにもなると推定したは興味深い。定家の日録そのものを心の憂さをはらすと代替品とするな
らば、『明月記』には有馬温泉へ湯治のために出かけている最中に漢詩を作っているも、湯治とも繋がり、心身
を癒すことが定家の動機であつたと推察されてこよう。

(以下次号)

註

- 〔1〕口頭発表『平家物語』初期生成と藤原定家(二軍記・語り物研究会二〇一九年四月二十六日 於 青山学院大学)の一部であつて、そのことをめぐっては、『平家物語』初期生成の側面——『栄花物語』から——として論稿化を予定している。
- 〔2〕『平家物語研究』(角川書店・一九六四年)一五二〜五三ページ
- 〔3〕山中裕「第三章 第二節 栄花物語の本質」『平安朝文学の史的研究』吉川弘文館・一九七四年)一九八〜二〇二ページ
- 〔4〕『栄花物語①』解説(小学館・一九九五年)五五六ページ
- 〔5〕平田俊春「第二章 『大鏡』の成立」『日本古典の成立の研究』日本書院・一九五九年
- 〔6〕山中裕「第二章 『栄花物語』の編纂」『栄花物語・大鏡の研究』思文閣出版・二〇一二年)六五ページ
- 〔7〕拙著「第七章 治承物語と西山の空間」(『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年)
- 〔8〕註「7」の同書「第八章 治承物語の復元」
- 〔9〕竹鼻績「解説」(『今鏡全訳注 下』講談社)六一八ページ
- 〔10〕「第一章 「原態」と「古態」」『平家物語の成立』名古屋大学出版会・一九九三年)二〇〇ページ
- 〔11〕「第二編 第四 五 平家物語と新古今集の性格」(『新古今世界と中世文学(下)』北沢図書出版・一九七二年)四〇五〜四〇六ページ
- 〔12〕「第一章 新古今的妖艶美と平家一門の栄華」(『新古今集とその歌人』角川書店・一九八三年)三九ページ
- 〔13〕藤本一恵「後拾遺和歌集全訳注(四)」講談社・一九八三年)二二三〜二四四ページ
- 〔14〕日本古典文学全集『新古今和歌集』(巻七 賀歌(七三九) 小学館・一九七四年)
- 〔15〕拙著「第一章 王法と仏法——『栄花物語』巻十五「うたがひ」の特質——」『愚管抄の創成と方法』(汲古書院・二〇〇四年)
- 〔16〕久保田淳は「新古今撰者は『栄花物語』に依つたか。」としている(『新古今集全訳 五』角川書店・二〇一二年)一八三ページ

ジ

- [17] 山中裕「第二章『栄花物語』の編纂」によると『栄花物語』正編三十巻の後の巻三十一から巻四十までは寛治六年(一〇九二)二月頃に成立している(『栄花物語・大鏡の研究』思文閣出版・二〇一二年) 六六ページ。定家生誕の七十年前であった。
- [18] 久保田淳「源経信の和歌について」(『山岸徳平先生頌寿・中古文学論考』有精堂・一九七二年)
- [19] 拙著「第II部 第八章 付録の文章について」(『愚管抄の創成と方法』汲古書院・二〇〇四年)・註「7」の同書「第II部 第八章 治承物語の復元」
- [20] 「第三章 第六節 イメージ」(『藤原定家の歌風』桜楓社・一九八五年) 四〇二〜四〇四ページ
- [21] 註「7」の同書「構築される空間とその外側——序にかえて——」(一三ページ)で、「冥顕二法」の道理・時宜相応に作り変えられていく道理を慈円は、叙述内部の「言語空間」に人を参入させようとしていると論じた。『平家物語』の表現——叙事に泣くということも——の論文で松尾章江が、『平家物語』にそくして「作中人物に享受者が一体化できるように仕掛けている」としているのと通じるはずである(『和歌文学研究』第一一八号・二〇一九年六月)。
- [22] 『藤原定家の研究』文雅堂銀行研究所・一九六九年) 一九八ページ
- [23] すでに石田吉貞は「百王説をも信じてみたと思われる。(中略)『愚管抄』における慈圓の百王思想と全く同じであって(中略)定家はこの思想に於ても慈圓の影響を受けてゐるのではないかと思はれる」として、さらに「慈圓の道理の思想も、或は又定家を動かしてゐるのではないかと思はれる。(中略)又日記を假名文字で書いたりするところも、慈圓の日本語尊重論に動かされた」と推定している(註「22」の同書) 一七五〜七六ページ
- [24] 「余情妖艶の躰——定家歌論の成立」(『国文学』学燈社・第二六卷第一六号・一九八一年二月)
- [25] 第II部 VII 「心詞の戦略——藤原定家——」(『緑の美学 歌の道の詩学II』頸草書房・一九九五年) 一六八〜七四ページ
- [26] 「解説 三 慈円歌と定家歌の違いについて」(『文集百首全釈』風間書房・二〇〇七年) 五二〜一五五ページ
- [27] 註「7」の同書「第八章 治承物語の復元」
- [28] 谷山茂「第四章 歌合における定家と家隆」(『新古今時代の歌合と歌壇』角川書店・一九八三年) 二四三ページ
- [29] 久保田淳「藤原定家」(集英社・一九八四年) 七六〜七八ページ
- [30] 森本元子「第三章 後鳥羽院歌壇における俊成卿女」(『俊成卿女の研究』桜楓社・一九七六年) 六四ページ
- [31] 註「30」の同書「第二章 歌人俊成卿女の形成」 四七ページ
- [32] 糸賀きみ江「新古今集前後の抒情——女流歌人を中心に——」(『和歌の歴史』桜楓社・一九七二年) 七九〜八一ページ
- [33] この通説に対して見直しがせまられている。田淵句美子『無名草子』の視座(『中世文学』第五七号・二〇一二年六月)である。

また田仲洋己も『無名草子』の一面(『国語と国文学』第九二巻第一号・二〇一五年一月)で「俊成・定家周辺の女性で平家一門との関わりが深く、女房としての出仕経験を有する人物が作者である可能性高いと判断されるのである」としている。しかし、原『平家物語』の『治承物語』の素材となる平家側の動向に確かな知見を有していた作者像が浮上してくる。筆者は今のところ、これまでの通説に従っておきたい。

[34] 第三章 第四節 空間(註「20」の同書) 三四三〜四四ページ

[35] 註「7」の同書「構築される空間とその外側——序にかえて——」一三三ページ

[36] 田仲洋己著「第三部 第四章 『御室五十首』 夢の浮橋詠をめぐって」(『中世前期の歌書と歌人』和泉書院・二〇〇八年) 六〇四〜六〇六ページ

[37] 江草弥由記「『物語二百番歌合』 構成論——藤原定家の編纂意識を探る——」(『国文学研究』第一五五号・二〇〇八年六月)

[38] 田淵句美子「『物語二百番歌合』の成立と構造」(『国語と国文学』第八一卷第五号・二〇〇八年五月)

[39] 山本美紀「藤原定家の本歌取りと『物語二百番歌合』——共通する創作手法・読む行為——」(『日本語日本文学』第二八号・二〇一八年三月)

[40] 村尾誠一「建保期の歌壇と定家」(『論集 藤原定家』笠間書院・一九八八年)

[41] 註「7」の同書「第十二章 屋代本平家物語の建礼門院の往生」

[42] 註「7」の同書「第八章 治承物語の復元」

[43] 富倉徳次郎著『平家物語全注釈 上巻』(角川書店・一九九六年) 二三四〜三五ページ

[44] 拙稿「今様をうたう徳大寺実定の意味——屋代本『平家物語』から——」(『熊本学園大学 文学・言語学論集』第四九・五〇合併号・二〇一九年六月)

[45] 註「2」の同書一五三〜五五ページ

[46] 『松浦宮物語』神威現象覚書——分身十人とその数の背景について——(『解釈』通巻四二九集・一九九〇年一月)

[47] 頭注(水原一『平家物語 中』新潮社・一九八四年) 二四五ページ

[48] 註「7」の同書「第七章 治承物語と西山の空間」

[49] 註「29」の同書 一九四ページ

[50] 『藤原定家』吉川弘文館・一九八九年) 八五〜八六ページ・九四ページ

[51] 註「48」と同じ。

[52] 「明月記を読む——定家の歌とともに・三十二、後鳥羽院と、遊び」(『短歌研究』第61巻第5号・二〇〇四年五月)

〔引用資料の典拠〕は次号に掲載。

〔付記〕

本論文は、「軍記・語り物研究会」(二〇一九年四月二十六日 於 青山学院大学)における口頭発表原稿「『平家物語』初期生成と藤原定家」をもとにしたものである。その時の有益な質問・意見を参考にしてまとめた。